

歌木簡・滋賀・紫香楽宮跡で発見 万葉集の成立過程に光

奈良時代に聖武天皇が造営した紫香楽宮（しがらきのみや）の跡とされる宮町遺跡（滋賀県甲賀市信楽町）で出土した木簡（8世紀中ごろ）に、日本最古の歌集である万葉集に収録された「安積山（あさかやま）の歌」が書かれていたと22日、市教委が発表した。万葉歌が木簡で見つかったのは初めて。万葉集とは表記が全く異なっていた。もう一つの面には「難波津（なにわづ）の歌」が書かれており、この2首を歌の手本とする伝統が、平安時代に編さんされた古今和歌集の時代から万葉集の時代まで約150年さかのぼって確かめられた。日本文学の成立史に見直しを迫る画期的な実物史料となる。

「歌木簡」は97年、宮殿の排水路と推定される溝から出土した。長さ7・9センチと14センチの2片に分かれ、幅は最大2・2センチ。万葉集になく、木簡などで残る難波津の歌の一部が書かれていることはわかっていたが、厚さが約1ミリしかなく、木簡の表面を削ったくずと考えられていた。栄原永遠男（さかえはらとわお）・大阪市立大教授が昨年12月に調べ直して見つかった。



史跡紫香楽宮跡から出土した万葉集の歌が書かれた木簡＝滋賀県甲賀市で2008年5月14日、森園道子撮影

両面とも日本語の1音を漢字1字で表す万葉仮名で墨書され、安積山の歌は「阿佐可夜（あさかや）」「流夜真（るやま）」の7字、難波津の歌は「奈迩波ツ尔（なにはつに）」などの13字が奈良文化財研究所の赤外線撮影で確認された。文字の配列などから元の全長は2尺（約60・6センチ）と推定される。字体や大きさが異なり、別人が書いたとの見方が強い。

万葉集は全20巻のうち、安積山の歌を収めた巻16までが745年以降の数年で編さんされたと考えられる。木簡は一緒に出土した荷札の年号から744年末〜745年初めに捨てられたことがわかり、万葉集の編さん前に書かれたとみられる。約400年後の写本で伝わる万葉集では訓読みの漢字（訓字）主体の表記になっており、編さん時に万葉仮名が改められた可能性がある。

2首は、古今和歌集の仮名序（905年）に「歌の父母のように初めに習う」と記され、源氏物語などにも取り入れられている。筆者の紀貫之の創作の可能性もあったが、古くからの伝統を踏まえていたことがわかった。【近藤希実、大森顕浩】

〈難波津の歌〉

難波津に咲くや（木こ）の花冬こもり今は春べと咲くや木の花

（訳）難波津に梅の花が咲いています。今こそ春が来たとして梅の花が咲いています

〈安積山の歌〉

安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに

（安積香山 影副所見 山井之 浅心乎 吾念莫国）

（訳）安積山の影までも見える澄んだ山の井のように浅い心でわたしは思っておりませぬ

（いずれも「新編日本古典文学全集」小学館より。「安積香山」の表記は、万葉集の原文）

【ことば】万葉集

奈良時代編さんの日本最古の歌集。全20巻に約4500首あり、主に飛鳥時代から奈良時代にかけての歌を収録。歌人としては柿本人麻呂、山上憶良、大伴家持、額田王などが知られる。天皇や皇后などの皇族のほか、東北や関東などの民謡「東歌（あずまうた）」や、九州沿岸の防衛に徴集された防人（さきもり）の歌なども収録し、作者層が幅広いのが特徴。

【ことば】紫香樂宮

奈良時代半ばの742年、聖武天皇が造営を始め、745年に難波宮（なにわのみや）から遷都したが、地震や山火事が相次ぎ、5カ月で平城京に都が移った。公式儀式を行う中枢建物「朝堂」の跡が宮町遺跡で01年に確認されたが、全容は不明。

毎日新聞 2008年5月22日 19時55分（最終更新 5月22日 20時12分）

紫香樂宮跡から出土の木簡に「万葉集」の和歌

万葉集に収録された「安積山の歌」の一部が書かれた木簡。上部の字が読める



に「阿」

奈良時代に聖武天皇が造営した紫香樂宮（しがらきのみや）（7

42）

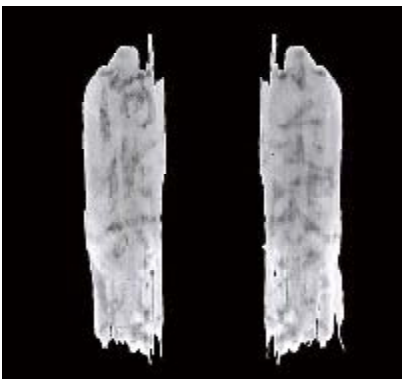
745年）があつた滋賀県甲賀市の宮町遺跡で出土した木簡に、万葉集に収められた和歌が記されていることが分かり、市教委が22日、発表した。

万葉歌が書かれた木簡が見つかったのは初めて。古今和歌集（平安時代）の仮名序で、紀貫之が「歌の父母（ちちはは）」と位置づけた「安積（あさか）（香）山（やま）の歌」の一部で、片面には対となる「難波津（なにわづ）の歌」が記されていた。木簡の年代は、万葉集が編纂（へんさん）されたのとほぼ同時期にあたり、日本最古の歌集の成立を考えるうえで極めて重要な発見となる。

木簡には、万葉集巻16に収められた「安積香山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに」のうち、1字で1音を表す万葉仮名で「阿（あ）佐（さ）可（か）夜（や）」と「流（る）夜（や）真（ま）」の計7文字の墨書が判読できた。

歌の大意は「（福島県の）安積山の影まで映す山の泉ほど、私の心は浅くありません」。陸奥国に派遣された葛城（かつらぎ）王が国司の接待が悪くて立腹したが、かつて王の采女だった女性が機転をきか

せてこう詠んだので、王は機嫌を直したという注が歌に添えられている。



出土した木簡のデジタル赤外線写真。左に万葉集に収録された「安積山の歌」の一部、右に「難波津の歌」の一部が書かれていた。滋賀県甲賀市教委提供

木簡は、宮殿中枢部の西約220〜230メートルの大溝から1997年度の発掘調査で出土した。長さ7・9センチと14センチの二つに割れており、いずれも幅2・2センチ、厚さ1ミリ。本来の長さは約60センチと推定され、儀式や宴会で詠み上げるのに使った「歌木簡」とみられる。744年末〜745年初めに捨てられたらしい。

全国の「歌木簡」を調べていた栄原永遠男（さかえはらとわお）・大阪市立大教授（古代史）が、宮町遺跡出土の「難波津の歌」木簡の裏に墨痕があるのを偶然見つけた。木簡は薄いため、片面にしか書かれていない削り屑（くず）とみられていた。

万葉集は745年以降の数年間に巻15までと付録が成立し、巻16は付録を増補して独立させたとする説が有力。今回の木簡は、万葉集完成前に書かれた可能性が強く、市教委は「この歌が当時、広く流布しており、それを万葉集に収録したのだろう」と推測している。

「難波津の歌」が書かれた木簡や土器は全国で三十数点が出土している。万葉集には収録されていないが、古今和歌集の仮名序では、「安積香山の歌」との2首を、手習いの最初の歌と紹介。今回の発見で、これらを一对とする伝統が、仮名序を160年さかのぼる奈良時代から続いていたことも明らかになった。

25日午後1時から、甲賀市信楽町の信楽中央公民館で報告会を開き、26〜30日、同市の宮町多目的集会施設で展示する。

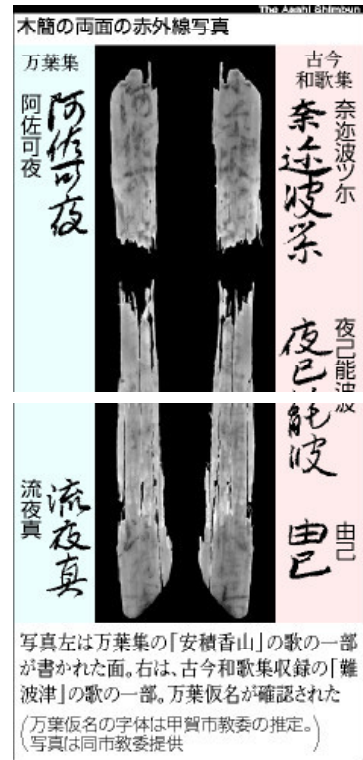
(2008年5月22日21時53分 読売新聞)

「安積香山…」 万葉集の歌、墨書の木簡見つかる 滋賀

2008年05月22日20時07分

滋賀県甲賀市教委は22日、奈良時代に聖武天皇が造営した紫香楽宮（しがらきのみや）跡とされる同市信楽町の宮町遺跡（8世紀中ごろ）から、国内最古の歌集の万葉集の歌が墨書された木簡が見つかったと発表した。万葉集収録の歌が書かれた木簡が確認されたのは初めて。出土した他の木簡に記載された年号から、この歌が収められた万葉集16巻の成立（750年前後）より数年から十数年前に書か

れたとみられる。



写真左は万葉集の「安積香山」の歌の一部が書かれた面。右は、古今和歌集収録の「難波津」の歌の一部。万葉仮名が確認された。
(万葉仮名の字体は甲賀市教委の推定。)
写真は同市教委提供

んだ「安積香山（あさかやま）影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに」が収録されている。別の片側にも「奈迹波ツ尔（なにはつに）」「夜己能波（やこのは）」「由己（ゆじ）」とあり、10世紀初めの平安時代に編さんされた古今和歌集収録の「難波津（なにはつ）に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」の一部とみられる。「難波津」の歌が書かれた木簡は大阪市中央区の難波宮跡などで見つかっている。

木簡の元の長さは文字の大きさから約60センチと推定。宮廷の儀式や歌会などで用いられた可能性が高いとみている。

市教委は25日午後1時から同市内の信楽中央公民館で報告会を開き、木簡を展示する。定員150人（先着順）。26～30日にも同市内の宮町多目的集会施設で展示する。いずれも無料。



【万葉歌木簡】「こりや、えらいこつちや」発見の瞬間

「『阿佐可（あさか）』はすぐに読めた。瞬間的に万葉歌だと直感、ドキツとした。あの古今集のセツト関係や、こりや、えらいこつちやと…」

大阪市立大大学院の栄原（さかえはら）永遠男（とわお）教授（日本古代史）は、その瞬間の興奮を今も忘れない。

木簡学会会長である栄原教授は昨年12月1日、それまで習書や落書きと考えられていた木簡のなかには歌会で使われたものもあるとして、「歌木簡」という新しいジャンルを提唱した。紫香楽宮跡調査委員でもある栄原教授が、同遺跡から出土した木簡の再チェックを開始したのは、その直後だった。

運命の瞬間が訪れたのは、1週間あまり後の12月10日。「難波津の歌」が書かれた木簡の形状を詳しく調べようと、裏返したときだった。念のため、赤外線でも見たが、間違いない。

しかし読めたのは一部で、まだ万葉歌と断定できなかった。そこで奈良文化財研究所が持つ、より性能が高い機械で解読、その結果、残りの4文字が判明した。そして、国文学者を交えた検討会議のなかで、「安積香山の歌」で間違いないとする見解に至った。

栄原教授の定義に該当する「歌木簡」はこれまでに14点が出土。うち「難波津の歌」は9点ある。「歌の人気もあるが、調査者が難波津の歌の発見例を知っていたからこそ、これだけの数が見つかった。同じように今回の発見が、万葉歌木簡の次なる発見につながってほしい」

2008. 5. 22 20:14

初出土の万葉歌木簡、万葉集の「原資料」（1/3ページ）



万葉集などが書かれた木簡について説明する栄原永遠男・大阪市立大学教授
5月14日、滋賀県甲賀市の甲賀市役所甲南庁舎

成立当時の万葉集の姿に、最も近づいた史料だ。22日に初の出土が発表された「万葉歌木簡」。書かれたのは、万葉集成立より前だったと推定される。「最古の歌集」としてあまりにも有名な『万葉集』だが、最古の写本でも11世紀半ば。大伴家持らが編纂（へんさん）した「オリジナル」の姿は、はっきりとは分かっていない。

一片の木簡の出土によって謎の一部が初めて明らかにになり、国文学者や古代史学者を興奮させている。

■ナマ資料

万葉集は、天平17（745）年以降の数年間に「巻1」から「巻15」がまとめられ、「巻16」と大伴家持の日記を含めた全20巻が783年ごろに成立したというのが一般的な説。一方、木簡が棄てられた年代は743〜745年と、ほぼ特定される。つまり、この木簡に歌が書かれ、読み上げられたのは、まさに万葉集の編集が始まる直前だ。

11世紀半ばに書き写された現存最古の万葉集は、「安積香山 影さへ見ゆる…」と漢字と平仮名で表記されている。これに対し木簡は、「阿佐可夜…」と音を漢字で表現する万葉仮名で記されていた。ここに研究者が着目する。

万葉学者で京都府立大学の山崎福之教授は「木簡はこれが万葉集だ、という原史料。残された最古の写本さえ300年も後のものだけに、編集当時はどの音にどの漢字を当てたのか、明確には分かつてはいない。今後大きな議論になっていくだろう」と、発見の意義を説く。

木簡の欠けた部分を、万葉仮名で推定復元した愛知県立大文学部大学院の犬飼隆教授（言語学）は「音で伝わってきた歌を万葉仮名で木簡に書き写し、漢字という文学的な衣装を着せて万葉集が成立する。最古の歌集が編集された筋道が見えてきた」と、成立の謎の解明を木簡に託す。

■2つの歌の性格

木簡の両面に記された「安積香（あさか）山の歌」と「難波津の歌」の2首は、905年に編まれた『古今和歌集』の序文「仮名序」で紀貫之が、「難波津の歌は、帝の御初めなり。安積山の言葉は、采女の戯れよりよみて、この二歌は、歌の父母のやうにてぞ手習ふ人の初めにもしける」と紹介。最初に覚えるべき和歌の手本だといっている。さらに年代が下った『源氏物語』などでも、手習いの歌としてセツトで登場する。

「木簡の両面が古今和歌集（の序文の2首）と、まさに同じペア。すごく驚いた」とは、大阪市立大文学研究科の村田正博教授（国文学）。2首をセツトにしたのは貫之の独創とも思われていたものが、実はその150年前からセツトとして認識されていたことになるという。

万葉時代の歌は、公的な「雑歌」と恋愛などプライベートな「相聞歌」、死にかかわる「挽歌（ばんか）」の3種類に大別される。

村田教授は「難波津の歌は、繰り返し咲く花で天皇家の繁栄を表現した、明るい気分にしてくれる雑歌中の雑歌。安積香山の歌は相手への深い思いを伝える相聞歌で、子供に和歌を教えるための歌としては適している」と2首がセツトになった必然性を説明。「幼い子がおけいこしている場面が伝わってく

るよう」と、木簡が生み出す情景を表現した。

小川靖彦・青山学院大教授（日本上代文学）の話 「天平年間までさかのぼる、万葉集の木簡が見つかったことは、大変興味深い。儀式や宴会の場で使われたものだろう。『古今集仮名序』で『和歌の父母』と記された2つの歌が、セツトであったことにも意味がある。難波津の歌は仁徳天皇という古代の聖帝を象徴し、安積山は東北地方という空間を象徴すると考えられる。『和歌による時間と空間の支配』といった観念がこの時期にすでに芽生えていたとすれば、驚きというしかない」

万葉歌木簡の時代、政情は激動（1/2ページ）

2008. 5. 22 20:49

今回の万葉歌木簡が書かれた時代とは、どんな世の中だったのだろうか。“天平文化”の華やかなイメージとは裏腹に、朝廷の内外で急速に力をつけ始めた藤原氏による陰謀が渦巻くなど、政情は激動していたことがわかっていく。

「天平」時代の幕開けとなる天平元（729）年、天武天皇の孫という名門皇族・長屋王（ながやのおう）が「謀反を企てている」との密告を受け、自殺させられた。藤原不比等（ふひと）の4人の息子たちによる陰謀といわれる。こうして権力を握った4兄弟も、遣唐使がもたらした天然痘にかかり、相次いで亡くなる。代わって政権を担当した皇族・橘諸兄（たちばなのもろえ）が反藤原氏政策をとり、九州を統括していた藤原広嗣（ひろつぐ）は反乱を起こす。

驚いた聖武天皇は平城京を離れ、紫香樂宮や恭仁（くに）京（京都府木津川市）などを、5年間にわ

たつて転々とする。この間、藤原仲麻呂を中心とする藤原氏一派と、諸兄や大伴家持（やかもち）らの反藤原勢力の対立が続いた。

緊張のまつただ中にあつた天平16（744）年1月、聖武天皇の皇子で皇位継承も有力視されていた安積（あさか）親王が17歳で急死する。『続日本紀』では死因は脚氣（かつけ）だが、仲麻呂による暗殺説も根強い。

2008. 5. 22 20:49

万葉歌木簡の時代、政情は激動（2/2ページ）

「紫香樂宮では、家持や諸兄らによる安積親王の擁立運動が盛り上がっていた。安積香（あさか）山の歌を口ずさんで、同じ読みの安積親王を連想しないことはありえない。天皇の治世の繁栄を歌った難波津の歌と裏表なのは、示唆に富んでいる」

こう指摘するのは、奈良時代の政治史に詳しい甲子園短大の木本好信教授。「安積親王の擁立で安定した国家を築こうとしたことを、2首の組み合わせから読み取れることは可能」という。

万葉歌木簡の年代は743年秋から745年春にかけて。安積香山の歌は、相手への深い気持ちを伝える意味が込められていることから、親王追悼の儀式で詠まれた挽歌（ばんか）の可能性もあると、木本教授はみている。

2008. 5. 22 17:15

万葉集の木簡が初出土 紫香樂宮、難波津の歌も（1/3ページ）

甲賀市・史跡紫香樂宮跡出土木簡 あさかやま面（左） なにはつ面（右） 奈良時代に聖武天皇が造営した滋賀県甲賀市信楽町宮町の紫香樂宮（しがらきのみや）（742〜745）跡から平成9年に出土した木簡の両面に、それぞれ和歌が墨書され、うち1首が万葉歌だったことが分かり、同市教委が2日、発表した。4500首以上の歌を収録している『万葉集』だが、木簡に記された歌が見つかったのは初めて。木簡は『万葉集』の成立以前に書かれた生々しいドキュメント史料で、歌集成立の過程などを探る画期的な発見として注目を集めそうだ。

木簡に記されていたのは、『万葉集』巻16に収録されている「安積香山（あさかやま） 影さへ見ゆる山の井の 浅き心を我が思はなくに」と、「難波津（なにわづ）の歌」として知られる「難波津に咲くや木の花冬こもり 今を春べと咲くや木の花」の一部。いずれも漢字を仮名的に用いた万葉仮名で書かれている。

2つの断片に分かれ、幅はいずれも2.2センチ、長さはそれぞれ14センチと7.9センチ。文字の大きさなどから、もともとは幅3センチ、長さ約60センチほどと推定できる。厚さは約1ミリ。「安積香山の歌」は7文字が、「難波津の歌」は13文字が残っていた。同市教委は、儀式や宴会で歌を読むときに使われたとみている。

2首は10世紀初頭、紀貫之らが編纂（へんさん）した『古今和歌集』の「仮名序」で「歌の父母（ちちはは）」と紹介されているポピュラーな歌。『源氏物語』や『枕草子』などでも手習いの歌としてセットで登場する。今回の発見で、このセット関係が『古今和歌集』を150年さかのぼることになり、これまで謎だった2つの歌の結びつきについても議論が高まりそうだ。

安積香山は福島県郡山市にある山で、万葉集の詞書（ことばがき）によると、この歌は東北に派遣された葛城王（かつらぎのおおきみ）（のちの橘諸兄（たちばなのもろえ））が国司の粗略な接待に気を

悪くしたが、応対した采女（うねめ）がこの歌を詠み、機嫌を直したと伝えられている。

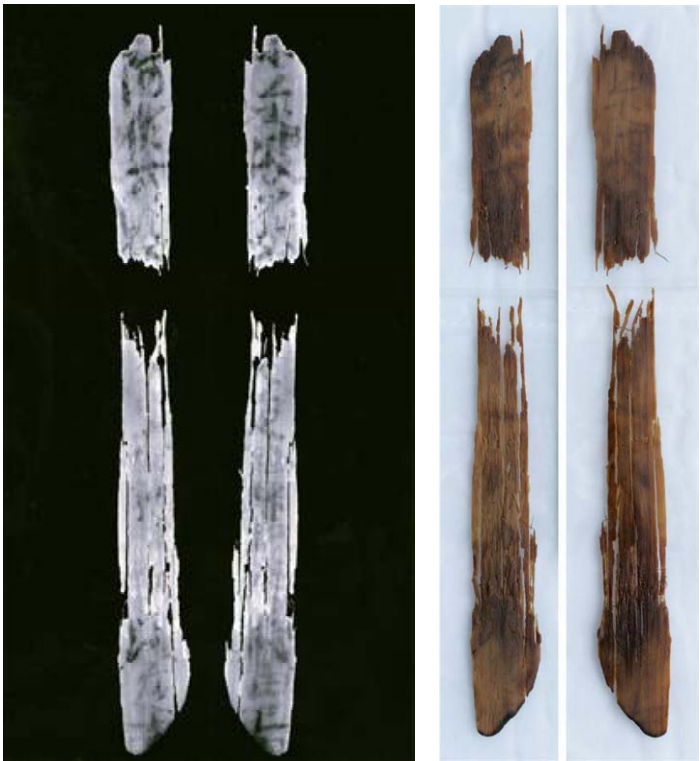
「難波津の歌」は、仁徳天皇の治世の繁栄を願った歌とされる。万葉集には収められていないが、奈良文化財研究所によると、この歌が記された木簡は7世紀後半以降の30例あまり確認。古くから有名な歌だった。

木簡が出土したのは、宮殿などの遺構が確認されている紫香楽宮中枢部の西側の脇を流れる基幹排水路跡。同じ個所から出土した年号のある木簡13点から、天平15（743）年秋から745年春にかけて棄てられたと推定できるといふ。

現地説明会の代わりに、5月25日午後1時から、甲賀市信楽町長野の信楽中央公民館で、「万葉歌木簡記念講演会」が開かれる。

万葉集 現存最古の歌集。全20巻からなり、仁徳天皇から759年までの和歌約4500首が収録。大伴家持や橘諸兄らが編集したとされる。雑歌（ぞうか）、相聞歌（そうもんか）、挽歌（ばんか）に大別される。素朴で力強い歌風が特徴で、文学的評価は高い。「巻1」から「巻15」までが、745年以降の数年間に成立。今回の木簡と同じ歌が収録された「巻16」と家持の日記がその後に増補され、782〜783年ごろに全20巻が成立したとする考えが有力。

紫香楽宮 天平14（742）年、聖武天皇が近江国甲賀郡（現在の滋賀県甲賀市）に造営した離宮。翌年ここで、大仏造立を発願した。745年に「新京」と呼ばれたが、同年に平城京に還都した。宮町地区で昭和58年から行われた発掘調査で、朝堂など中心施設が検出された。これまでに平城京に次ぐ約7000点以上の木簡が出土している。



万葉集の木簡、初出土

紫香樂宮 編纂過程解明に道

聖武天皇が造営した紫香樂宮（七四二―七四五年、滋賀県甲賀市）跡で出土した木簡に最古の歌集、万葉集の「安積山の歌」が書かれていたことが分かり、市教委が二十二日発表した。万葉集の歌の木簡が見つかったのは初めて。古典文学の成立過程を解明する第一級の史料となりそうだ。

反対の面には万葉集には収録されていないが、古代から伝わる「難波津の歌」が記されていた。両歌は平安時代に紀貫之が古今和歌集の仮名序（九〇五年）で「和歌を習得する際に必ず学ぶもの」として「歌の父母」と記している。

両歌が書かれた史料としては仮名序より百五十年さかのぼる。

木簡は一九九七年に宮の中心部近くの溝から出土。幅は約二センチ、厚みは約一ミリで木簡の削りくずとさされていた。長さは推定六十センチ。筆跡から別人が書いたとみられ、先に難波津の歌が書かれ、儀式などに用いられた後、再利用され、安積山の歌が記されたらしい。

文字は冒頭の「奈迹波ツル」（難波津に）や「阿佐可夜」（あさかや）など一音に一字をあてる万葉仮名で記され、二十文字が残っていた。

また、溝の埋まった年代が万葉集成立直前とみられることから、万葉集編纂以前に記された木簡とみられている。

市教委は「儀式や宴会で歌を詠む際に使ったのだろう」としている。

難波津の歌は、これまで木簡などで約三十例見つかっている。皇子だったころの仁徳天皇に即位を勧めた歌とされる。

安積山の歌は、陸奥の国に派遣された葛城王が国司の対応に怒った際、女官が宴席で詠み、王の機嫌が直ったと伝えられている。木簡は二十五日午後一時からの報告会で展示される。

「削りくず」一転大発見 大阪市立大教授、再調査で

「歌の父母」の存在を約百五十年もさかのぼらせた大発見の陰に、古代史を研究する栄原永遠男大阪市立大教授の鋭い観察力があつた。

木簡は溝の中から大量の削りくずとともに泥まみれで発見された。厚さはわずか一ミリで、木簡ではなく、その削りくずと誰もが考えていた。

表面に「奈迹波ツル」の文字が見え、「難波津の歌」の一例にすぎないとされ、二〇〇〇年の学会誌で簡単に紹介されただけだった。

ところが、昨年十二月に木簡を再調査していた栄原教授が削りくずを裏返したところ、「阿佐可夜」の文字が肉眼で見て取れた。万葉集に収録されている「安積山の歌」と直感、「これは大変な発見だ」と急遽、奈良文化財研究所の赤外線装置による分析を依頼、世紀の発見に結びついた。

両手で持って木材を削る鉋（かんな）のような工具を使えば、極薄の木簡が作れることも判明。木簡研究所に新たな視点を投げ掛けた。

木簡の両面の赤外写真。万葉集の「安積山の歌」が書かれた面と「難波津の歌」の面（滋賀県甲賀市教育委員会提供）

歌の全文と訳文

木簡に記された歌の全文・訳文は次の通り。

「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」（難波津に梅の花が咲いています。今こそ春が来たといって梅の花が咲いています）

「安積香山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわが思はなくに」（安積山の影まで見える澄んだ山の井のように浅い心をわたしは思っていないのです）